

# 胞衣壺考

## A Study of “ENATSUBO” (The jar put in the placenta)

川 口 宏 海

Hiroumi KAWAGUCHI

### 1. はじめに

本学園は、昭和61年に短期大学が伊丹市に移転したのを機に、同年より伊丹市教育委員会から委託を受け、有岡城跡・伊丹郷町の発掘調査を行っている。これには、大手前女子大学日比野丈夫学長を委員長とする有岡城跡調査委員会を組織し、同大学史学科藤井直正教授を調査主任とし、川口と同大学史学研究所研究嘱託前川 要が卒業生らとともに現地調査に当たっている。

昭和62年からは、宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査を行うこととなった。これには、兵庫県教育委員会、大阪経済法科大学調査団とともに、3者共同でこれに当たっている。

本文は、経過報告を兼ねて、この調査を通じて知見にのぼった近世の「胞衣壺（えなつぼ）」について、若干の所見をまとめたものである。従って、この成果は、もとより川口個人のものではなく、この調査に当たっている関係者全員の成果である。

### 2. 遺跡の概要と略史

有岡城跡・伊丹郷町は、兵庫県伊丹市のほぼ中央、猪名川の西側の標高20m前後の台地上に立地する。この付近は、旧摂津国川辺郡に属する。

遺跡の歴史は、縄文時代中期に始まる。後、弥生時代、古墳時代、奈良時代と断続的に人跡が認められ、中世以降、文献資料にも度々登場するようになる。

中世後期には、土豪伊丹氏の本拠地となっており、戦国時代には、その居城「伊丹城」がこの地に築城されていたことが文献資料から窺える。そのため、この地はしばしば戦乱に見舞われるが、伊丹城は堅固な名城として名を馳せている。

その後、天正2年（1574）に、池田氏の被官から成長してきた荒木村重によって伊丹親興はこの城を追われ、城は村重の居城となり「有岡城」と改名された。このとき、村重によって城下町と城を堀と土塁で取り囲む「惣構」が構築されたと考えられている。また、のちの伊丹郷町の骨格も、このとき形づくられたと考えられる。しかし、天正7年（1579）には、織田信長の勘気を蒙ったために攻められ、落城する。

## 胞衣壺考

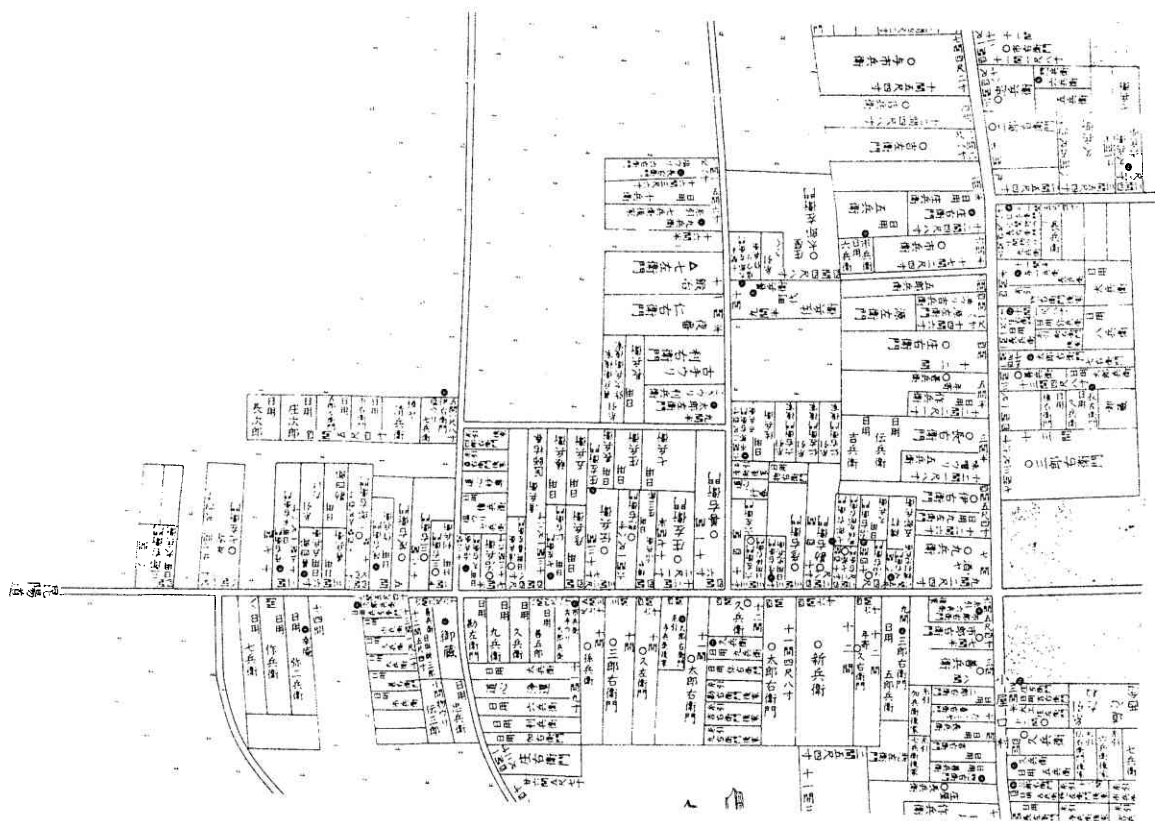


図1 元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図  
（『伊丹古絵図集成』伊丹市役所 所収）

のち、池田信輝の嫡子之助が領有した後、豊臣秀吉の直轄領となり、城は廃城となった。豊臣氏滅亡後は、徳川幕府の直轄領の時期をへて、寛文元年（1661）近衛家領となった。以後、正徳元年（1711）まで一部が幕府領となったりするが、その後明治まで近衛家領としてあった。

城下町は、城が廃城となったのちも存続し、文禄年間（1592～96）には魚屋町・材木町など15町があったと記されている。その後、酒造業・運送業などで発達し、元禄年間（1688～1703）には24町、享保年間（1716～35）には、27町となった。これらの町を中心に周辺の大広寺村・円正寺村・外城村など15カ村が結びつき、伊丹郷町を形成している。町は、有力酒造家などを中心とした惣宿老制によって運営されていた<sup>1)</sup>。

発掘調査では、東側の「侍町」地域では、伊丹城・有岡城時代の上級家臣団の屋敷地とそれを取囲んで縦横に設けられた中小の堀が検出され、西側の町屋地域では、現在の町並みに沿った形で同時代の溝が検出されている。また、全域で江戸時代の町屋の遺構が良好に検出されており、なかでも、酒蔵や酒造用のかまど、井戸などかつての伊丹の繁栄を彷彿とさせる遺構が注目される。このほか、江戸時代の各時期に描かれた6枚の絵図との比較対象も進んでおり、特に現在の屋敷割は天保15年（1844）伊丹郷町分間絵図<sup>2)</sup>と良く一致することが判明している。このように、記録に表れない当時の具体的な姿が次々と判明

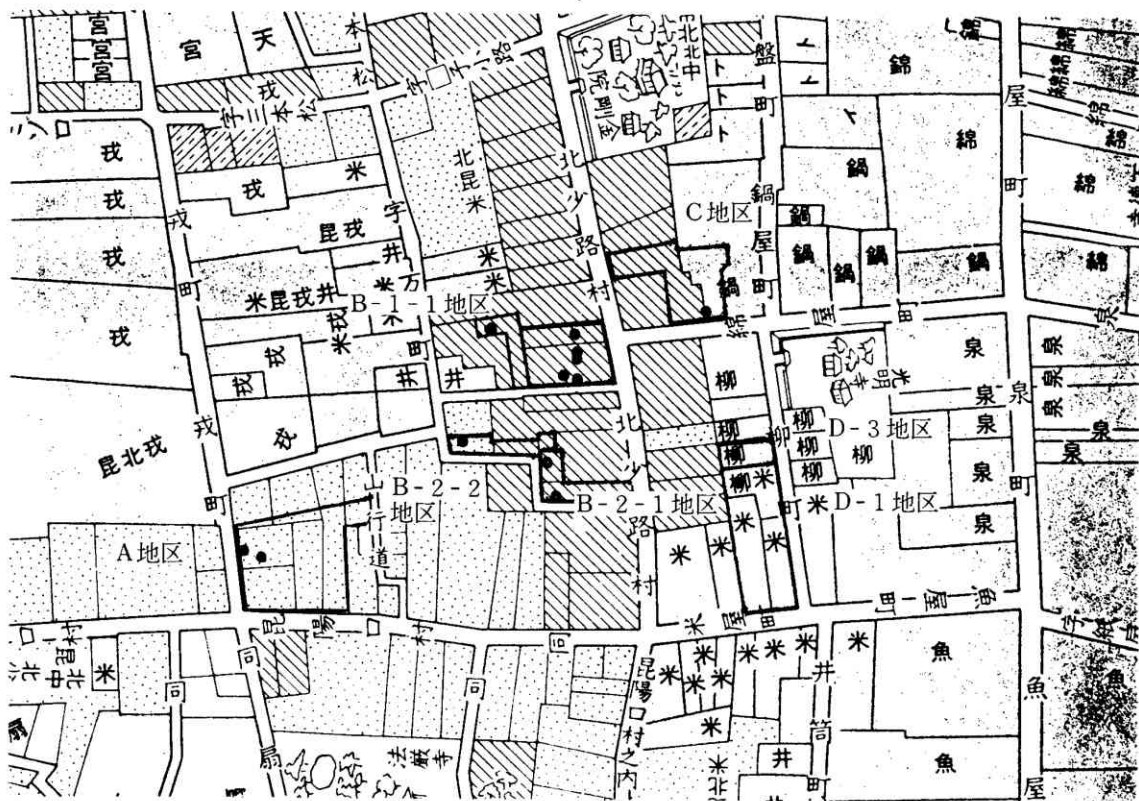


図2 調査地区及び胞衣壺出土地点図

（天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図『伊丹古絵図集成』伊丹市役所に加筆）

しつつある<sup>3)</sup>。

### 3. 検出された胞衣壺と考えられる遺構

胞衣壺が知見にのぼったのは、一昨年から開始された宮ノ前地区の調査の中である。江戸時代の町屋跡の遺構面から、地中に埋められた土師質土器の壺がいくつか検出された。これらの壺のなかには、茶褐色の固形物が入っていたり、墨と筆が入れられていたりする例が見られた。調査に当たっている3者の連絡会議の席でこれを報告した際、兵庫県教育委員会の岡崎正雄氏より胞衣壺ではないかという指摘を受けた。その後、このような例は調査面積が拡大するに連れて増え、現在17例を数える。また、過去のJ R伊丹駅前地区でも検出しており、分布範囲も郷町全体にわたっていることが判明した。

胞衣（えな）とは、胎盤の事をいう。胎盤は、「胎児の胎膜の一部と母体の子宮壁の一部とが複合してできたほ乳類特有の胚体養育器官<sup>4)</sup>」であり、出産のときには、胎児が体外にでたあと、子宮の収縮に伴って脱落膜から剝離し体外に排出される。これを一般に、後産（あとざん）と呼んでいる。また胎盤は各地で呼び名を異にし、関東地方では「エナ」あるいは「イナ」、近畿・中国地方では「ヨナ」、四国・九州地方では「イヤ」などと呼ばれている<sup>5)</sup>。胞衣壺とは、この胎盤を収めた壺をいう。

以下に、現在までに検出した胞衣壺と考えられる事例の代表的なものを詳述する。

胞衣壺考

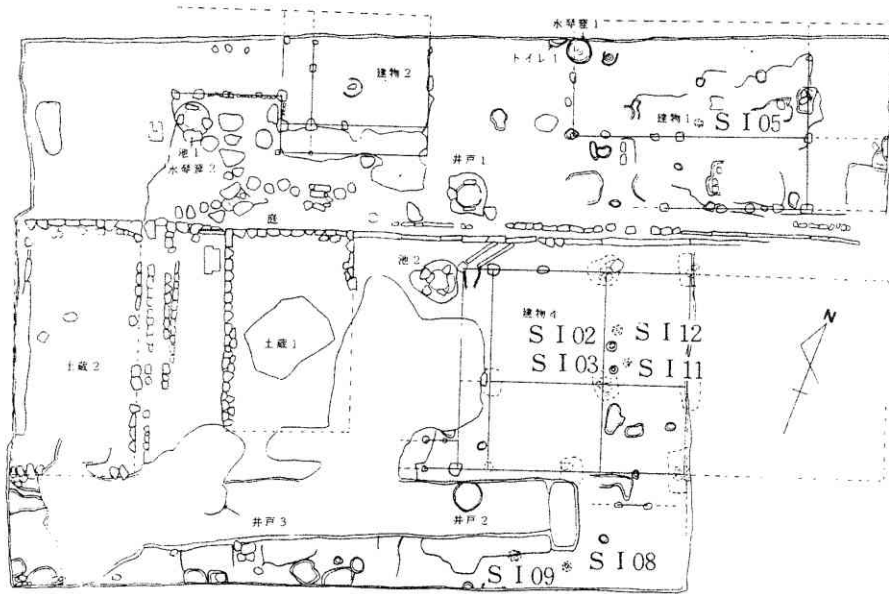


図3 B-1-1地区 第1次面遺構全体図 S=1/300

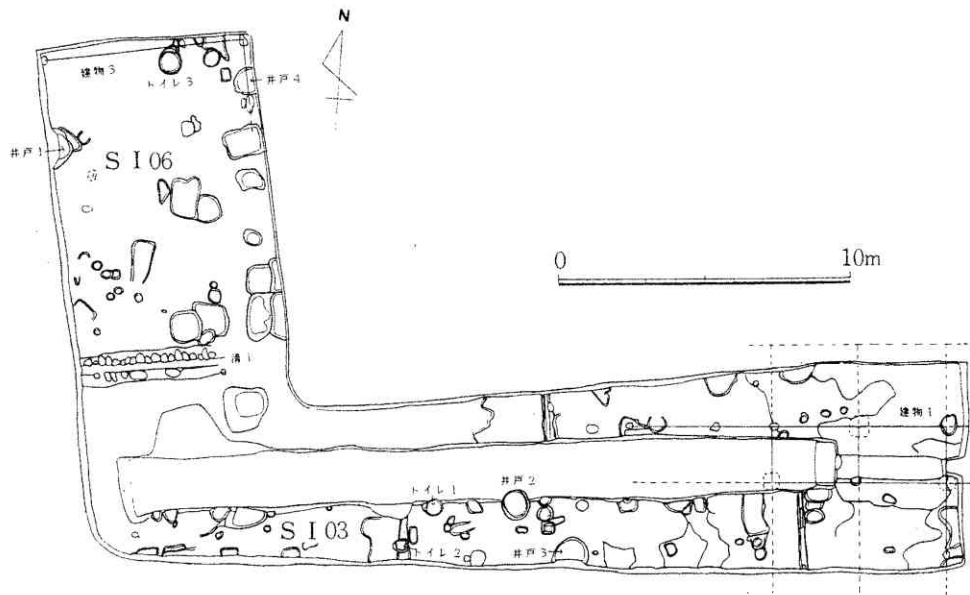


図4 B-2-1地区 第1次面遺構全体図 S=1/300

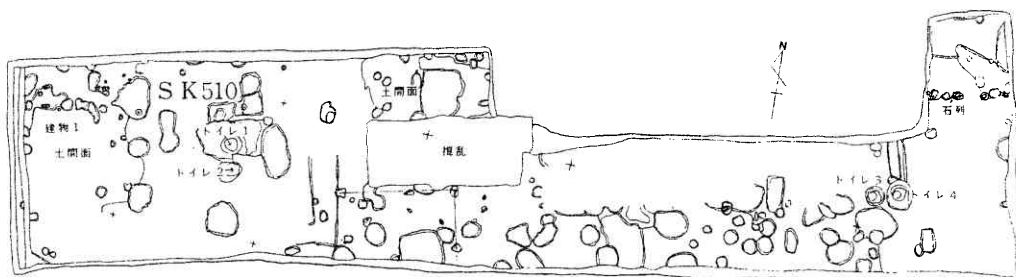


図5 B-2-2地区 第1次面遺構全体図 S=1/300

## ①. 宮ノ前地区第53次調査B-1-1地区の例（図3）

この調査区は、東側が猪名野神社に至る道路、宮ノ前商店街通りに面している。

ここでは、飛鳥時代から近代まで5面の生活面を検出した。このうち、このような壺は、第1次面＝最上面（江戸時代末期～近代）と第2次面（江戸時代後期）で7個体検出した。第1次面では、道路に面して主屋と考えられる2棟の建物（建物1・4）等を検出した。

出土した壺のうち、S I 02・03は建物4内の通り庭と考えられる場所に、土間を掘り込んで、2個体近接して埋納している（図6）。S I 08・09は、同一屋敷地内の庭部分でやや離れて検出した。このうち、S I 09は、丹波焼徳利とともに埋納されていた。S I 11・12は、第2次面で検出したもので、建物4と同一規模でこれの前身と考えられる建物10内の、やはり通り庭と考えられる場所である。ここは、上面のS I 02・03と全く同一場所である。このうち、S I 11には、茶褐色の固形物と墨・筆が遺存していた（図7）。また、S I 12にも茶褐色の固形物が遺存していた（図9）。S I 05は、第1次面の別の屋敷地の建物1の床下部分から単独で出土した。また、S I 05・09以外は、すべて蓋を伴っていた。

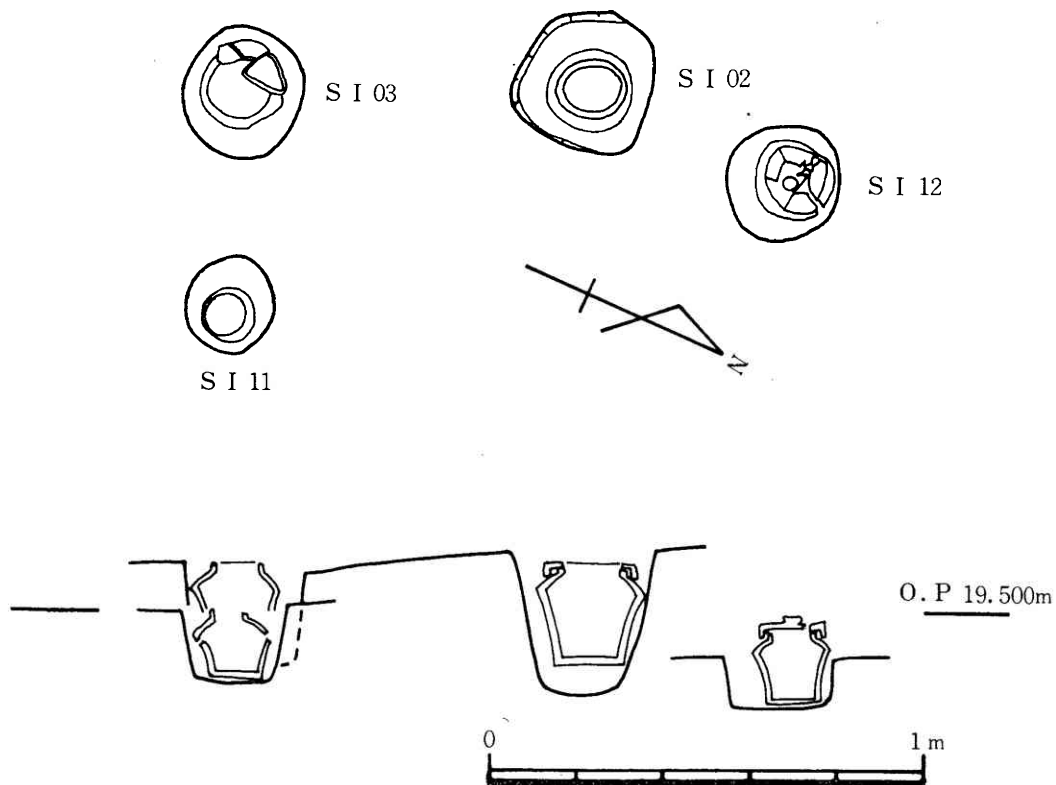


図6 B-1-1地区 S I 02・03・11・12

## 胞衣壺考

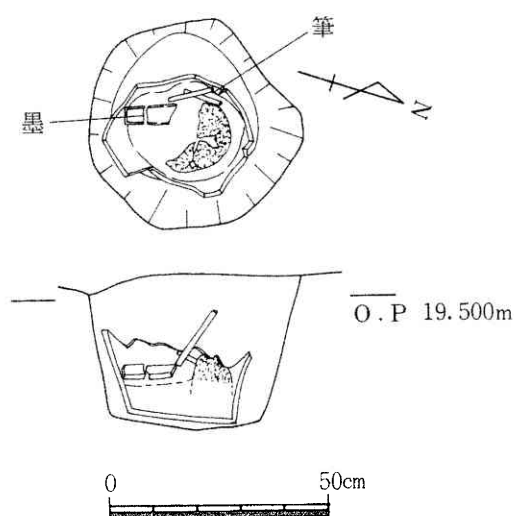


図7 B-1-1地区 S I 11

側の道路に面した部分に間口4間半の主屋があり、西側の裏手にも土間が見られることから小規模な建物が存在していたものと考えられる。これが同一の持ち主のものか路地側を入口とする別人のものかは、不明である。土師質土器壺S I 03は、裏手の建物の土間を掘りこんで埋納されていた。蓋および内容物は、見られなかった。第2次面（江戸時代後期）のS I 06（図9）も裏手にたてられた建物の土間部分から蓋を伴って検出された。これには、茶褐色の固形物が残っていた。

## ③. 宮ノ前地区第53次調査B-2-2地区の例（図5）

ここには、戦国時代から近代までの3面の生活面がある。土師質土器壺（図9）は、第1面（江戸時代中期～近代）西側で検出した土壌S K 510の隅に埋納されていた（図8）。この調査区は、西側が道路に面しており、この部分には礎石は残っていないものの土間が見られ、間口4間、奥行3間半の建物1の存在が推定できる。この部分は上層が攪乱されており、第1次面は江戸時代中期の面である。

S K 510には、年代推定の容易な伊万里焼碗などの共伴遺物がみられ（図9）、他の例に比べて非常に重要である。伊万里焼碗には、コンニャク印判による菊花文を施したもの（同図-4）や深手で高台が「ハ」の字にひらくもの（同図-5）、厚手で口縁部が外反するものなどがみられ、大橋康二氏の編年案<sup>7)</sup>のⅢ期、なかでも18世紀中頃から後半の年代観が与えられる。したがって、この土師質土器壺の年代観はそのころに下限を置くことができる。

このほか、兵庫県教育委員会が調査したD-1地区では、江戸時代中期の生活面の裏庭部分から、備前焼の朱泥塗の小壺に5枚の寛永通宝や、木板に、

□□□□□

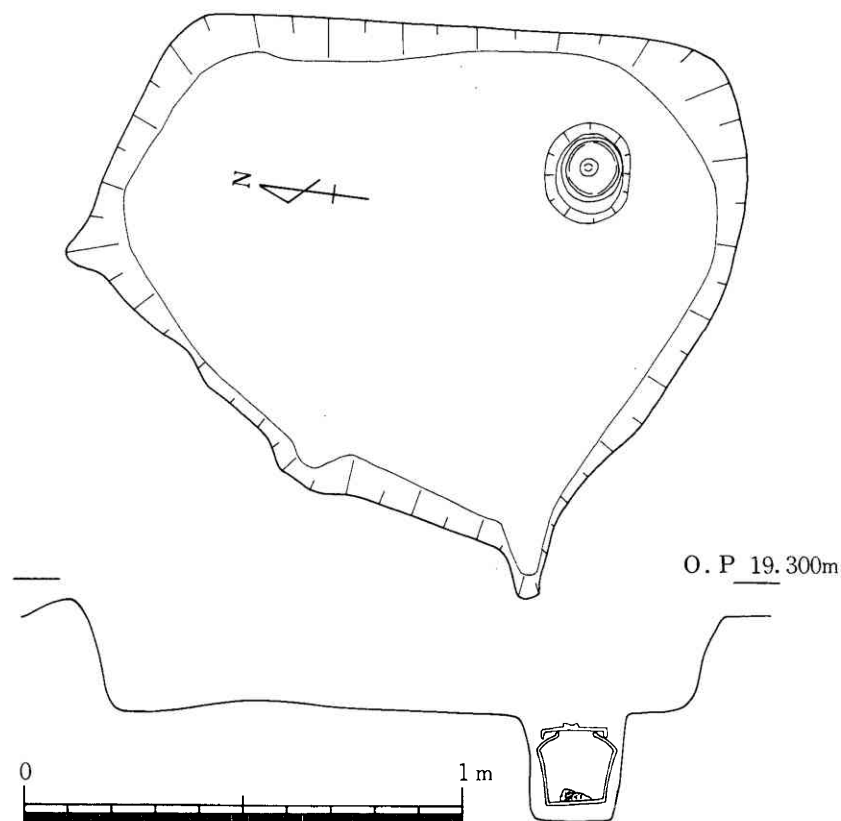


図8 B-2-2地区 S K 510

福富満□

金生水

土生金

と書いたものを入れた例があり、これものちに述べるように胞衣壺と考えられる。この場合木板が壺内にみられ、これで蓋をしたものと考えられる<sup>8)</sup>。

また、同じ土師質土器壺に硯・墨・筆を硯箱に入れた状態をあらわしたミニチュア土製品と実物の墨を入れた例（図9・図版3）が、大阪経済法科大学調査団が調査したC地区S K 05より出土している<sup>9)</sup>。これも、江戸時代中期の生活面での例であり、出土場所は建物の入口付近である。

これらの屋敷地内での出土場所をまとめると、

- A. 主屋建物の中 11例
- B. 主屋建物の入口 2例（方角は屋敷地中央より南と西）
- C. 裏庭 4例（方角は屋敷地中央より南-2、西-2）

となる。主屋建物内での位置は中心部付近である場合が多く、床下かどうかは特定し難いが、通り庭と考えられる例が5例ある。また、ほとんどが蓋を伴っており、基本的に蓋をすることが通例であることがわかる。埋納する深さは、ふつう壺の上部がわずかに隠れる程度である。

胞衣壺考

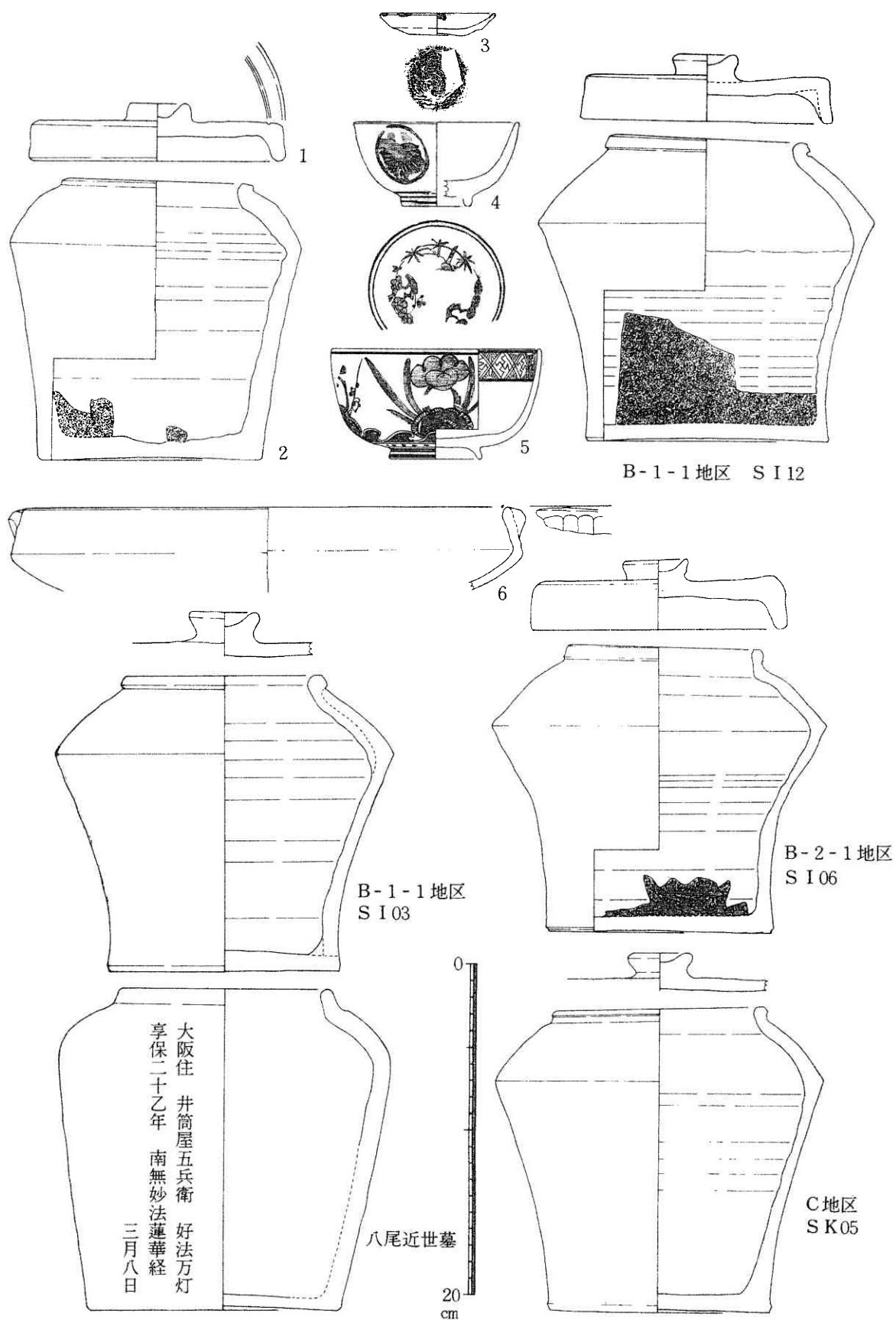


図9 遺物実測図 (1~6 B-2-2地区 SK510)



次に、容器である土師質土器壺について、その性格と時期的位置付けを試みたい。

#### 4. 容器に用いられた土師質土器壺について

このような、口縁部が短く直立し肩の張った小型の壺は、通常、火消壺として用いられたものと考えられている。これに大きさ・形が非常に良く似た金属製の火消壺は、炭を用いていた昭和40年代頃まで近畿地方の一般の家庭で普遍的に目にすることができた。

しかし、先のこれらの壺は、すべて一次的な使用である。また、火消壺として使用する場合、地中に埋納するのは非合理的である。しかも、付近には竈はない。このような事実は、これが火消壺以外の目的で使用されたことを示唆している。

##### ①. 分布と性格

出土例を調査報告書でひろってみると、兵庫県下では姫路城下町で、砂目跡の唐津焼皿などとともに出土したものが、1例知られる<sup>10)</sup>。ただ、これは調整技法に差異が認められ、同一系列におけるかどうか疑問である。

大阪府下では、堺市堺環濠都市遺跡（とくにS K T 14調御寺跡）<sup>11)</sup>とその周囲に位置する浄光寺本堂跡（墓地）<sup>12)</sup>・翁橋遺跡<sup>13)</sup>・向泉寺跡遺跡（墓地）<sup>14)</sup>などで大量に出土している。また、大坂城跡でも見られる<sup>15)</sup>。なかでも、豊臣氏大坂城期の天正8年～同18年（1580～90）前後の層から出土したものが、注目される。これは包含層から出土しており、火消壺として使用した痕跡はない。このほか、八尾市八尾近世墓でも大量に出土している。ここでは、体部や蓋に年号が墨書された例があり、特に享保20年（1735）銘の壺が注目される<sup>16)</sup>（図9）。

これらの出土例を通観して気づく点は、

- A. 分布範囲は、大阪府下の都市を中心としており、例外的に姫路城下町で出土している。
  - B. 一般の住居跡でも出土しているが、圧倒的に多いのは墓地からの出土例である。墓地では、これを蔵骨器として使用している。
  - C. 管見に触れる最古の例は、大坂城跡出土の16世紀第4四半期の例である。
- といった諸点である。

また、使用例は火消壺として用いられたものもあるが、圧倒的に多いのは蔵骨器としてであり、次に本例のような使用例である。本例の意味付けは、後述するとしても、第二義的な使用例が圧倒的に多いことは、これを単純に「火消壺」と呼ぶことを躊躇させる。むしろ、多様な用いられ方をする「壺」と呼ぶべきではなかろうか。大坂城の例は、それを示している。

ところで、このように数多く使用されている理由は、なんだろうか。これには、江戸時代の壺としては一般に陶器が用いられているが、これに比べておそらく安価であったた

## 胞衣壺考

め、一度きりの使用に適していたことが考えられる。また、蓋を有していたことも利用に適していたものと考えられる。

土師質の土器は、古来火に強く煮沸容器として使用されることが多い。堺・大坂では、16世紀には、土釜・土鍋・火舎・火鉢・竈（移動式のもの）・灯明皿などが播鉢・甕・皿・壺などと共に見られる。しかし、17世紀にはいると、土釜・土鍋は鉄釜・鉄鍋に、播鉢・壺は陶器製のものに、皿は陶器製・磁器製のものにそれぞれその座を奪われ、土鍋は炮烙に転換し、これと、火舎・火鉢・竈・灯明皿など火に関係する物のみが命脈を保つ。甕は、堺においては唯一例外的に、広く用いられた便槽と蔵骨器として生き残る。壺も、火消壺としても使用されることがあった為に命脈を保ったのであろう。それと同時に、先の理由から、甕と共に蔵骨器としても使用されるに至るのではないだろうか。

### ②. 時期的位置付け

次に、これらの遺物を個々に観察し、時期的位置付けを試みたい。

これについては、過去に玉山健史氏、北野俊明氏が触れておられるが<sup>17)</sup>、その後資料も増加してより流れをつかみ易くなってきた。御二人の成果を発展的に継承して、試みたいと考える。

現在のところ最古の例と考えられる大坂城跡出土の壺は、口径13.6cm、器高21.3cmを測り、口縁部は長く内上方にのびる。口縁端部は、水平に切る。肩部は丸く内傾し、体部はややすぼまりつつ底部に至る。外面肩部は横方向のヘラナデ、体部は縦方向のヘラナデ、体部下端は横方向の弱いヘラケズリ、底部はナデである。

堺市浄光寺本堂跡では、これに良く似た形態をもつものが出土している。S I 74がそれで、口径20cm、器高25.1cmを測り、上部が突出するつまみを持つ蓋を伴っている。この段階のものは、粘土円盤を底部とし、体部は粘土ひも成形となっている。しかし、ロクロを用いないためか体部が歪むものも多い。この墓地は古寛永を中心とする時期に営まれており、これは、17世紀第2四半期～第3四半期頃に位置付けられる。

堺環濠都市遺跡S K T 14でも、類似の遺物が出土している。この遺跡も近世墓地であり、下層の堀との関係から17世紀第3四半期から営まれたと考えられる。壺のうち浄光寺本堂跡のものに近いものは、2点図示されている。1点はS I 003-2で、口径（推）20.4cm、器高24.2cmを測り、上記のものとの大きな差異は体部外面ヘラによる縦方向のナデではなくヨコナデを施す点である。体部内面ヨコナデ、外面体部下端にヘラケズリを施す。また底部外面には、離れ砂痕が見られる。次に、八尾近世墓出土の享保20年（1735）の紀年銘資料が挙げられる。これも、先のものに比べて肩部径と底部径の差が大きくなっており、底部がすぼまった感じがする。外面体部はヨコナデ、肩部には、装飾を意識した横方向のヘラミガキが施される点が特徴である。これは、先のヘラナデが肩部のみに残り、発展し

たものと考えられる。また、基本的な製作工程は同様であるが、先のものに比べて均整のとれた形態をなす。同一タイプでより大型のものがS K T 14でみられ、法量のバラエティも見られる。また、これに組合う蓋は、天井部外縁に一条の沈線を施し、つまみ上部がややくぼむ。八尾近世墓に享保17年銘（1732）のものがある（図版2）。

18世紀中頃から後半の共伴遺物を持つ伊丹郷町B-2-1地区S K 510出土の壺は、これに続くものと考えられる。口径11.4cm、器高16.7cmを測る。八尾近世墓のものに比べると、形態では体部と肩部との境が明瞭となり、肩部は内湾する。体部は逆に外反する。口縁部は、短く丸くなる。内面には、ロクロ目が明瞭に見られ、全体をロクロ成形によって製作していることが窺える。外面肩部のヘラミガキは見られなくなり、体部まで回転ナデを行う。

これに伴う蓋は、外面天井部に壺外面底部に見られる板目痕・離れ砂痕が残り、底部と同様に粘土円盤を作り、これに口縁部となる粘土ひもを足して逆位で製作されたことがわかる。つまみは上部がへこみ、その中央部はわずかに突出する。また、天井部外縁に一条の沈線を施す。このような例は、同一タイプのすべてに見られるわけではないが、このタイプの段階には、多く見受けられる。

これは、小型品であり、同じ特徴を持つものには、以下のような法量のバラエティが見られる。

口径	器高
a. 約11.5cm（3寸8分）	約16.5cm（5寸5分）
b. 約12cm（4寸）	約18cm（6寸）
c. 約15cm（5寸）	約23.5cm（7寸5分）
d. 約16.5cm（5寸5分）	約27cm（9寸）
e. 約19.5cm（6寸5分）	約25.5cm（8寸5分）
f. 約21cm（7寸）	約30cm（1尺）

（S K T 14と伊丹郷町の資料より）

これをみると、口径・器高とも基本的に一寸を単位として最低6種類の法量差があることが分かる。

ところで、このような法量の分化やロクロ成形への転換は、なにを意味するのであろうか。それはおそらく、このころより需要が急激に増え、それに答えるための量産化が図られた結果ではないかと考えられる。事実、このタイプのものがもっとも多く出土しており、これを確証付ける。

このタイプよりさらに時期が下がると考えられるのが、伊丹郷町B-1-1地区S I 03・12、B-2-1地区S I 06などである。これらの特徴は、肩部の張りがさらに強くなり、内湾していた肩部が直線的になる事である。また、蓋では、天井部外面にみられた離

## 胞衣壺考

れ砂痕が回転ナデによって消されてしまう。伊丹郷町では、このタイプの出土例が最も多い。このうち、B-1-1地区S I 09には、幕末～明治頃と考えられる丹波焼徳利が共伴しており、19世紀中頃前後に時期をおくことができる。

以上の事実から、これをまとめると図10のようになる。

このうち、大きな画期は、ロクロを使用し、量産化される4段階に認められ、これをⅠ・Ⅱで表した。

これらの位置付けにより、伊丹郷町の土師質土器の埋納例は、18世紀中頃～後半の例に始まり、幕末～明治の例を最後としていることがわかる。

### ③. 残された問題点

この土師質土器壺についてさらに述べるべき点は、a. その起源、b. 生産地と生産体制、c. 流通機構、d. 終焉についてなどであり、この根本的な大問題にたいして筆者の力量は全く力不足である。従って、これらの諸点についての考察は、今後の課題としたい。

ただ、その糸口となり得るであろういくつかの知見について、最後に羅列し、この項を終えたい。

起源については、前述した16世紀後半の例をさかのぼるものは、現在見られない。しかし、これと非常に良く似た短頸壺に瓦質土器壺があり、奈良町・京都・大坂・堺・高屋城跡など広範囲にわたる遺跡の16世紀後半から17世紀前半の遺構から出土している。その出現は、高屋城跡の例などから<sup>18)</sup>、土師質土器壺よりやや早いと考えられる。これも現在のところ不明な点が多く、生産地についても漠然と奈良ではないかと言われている。面白いことに、これも蔵骨器として用いられる例が元興寺極楽坊<sup>19)</sup>などでみられる。起源については、これとの関連性が大きいのではないかと考える。

生産地については、生産遺構が検出されておらずこれも特定出来ない。ただ近世において、このような土師質土器を生産している可能性があるのは、「湊焼」と呼ばれる土器を生産していたとつたえられる堺の湊村である。「湊焼」の実態は文献からはあきらかでなく、ただ炮烙が確認できるのみである<sup>20)</sup>。しかし、現在、近世の多器種にわたる土師質土器のうち、堺で出土する甕・火鉢・風炉・七輪・十能・烙烙などは胎土・焼成に共通点があり同一生産体制下において生産された可能性が強いこと、なかでも未使用品がまとまって出土する例があることなどから、堺を生産地と考える意見は多い。本論の壺もまた、胎土・焼成がこれらのものと極似する。従って、現時点では、これを「湊焼」と考えておきたい。

## 5. 胞衣を埋める風習と伊丹郷町出土遺物

胞衣を埋める風習については、考古学、民俗学、文献史学<sup>21)</sup>のそれぞれが、成果を上げている。

大手前女子学園（大手前女短大研集）「研究集録」第9号（1989年）

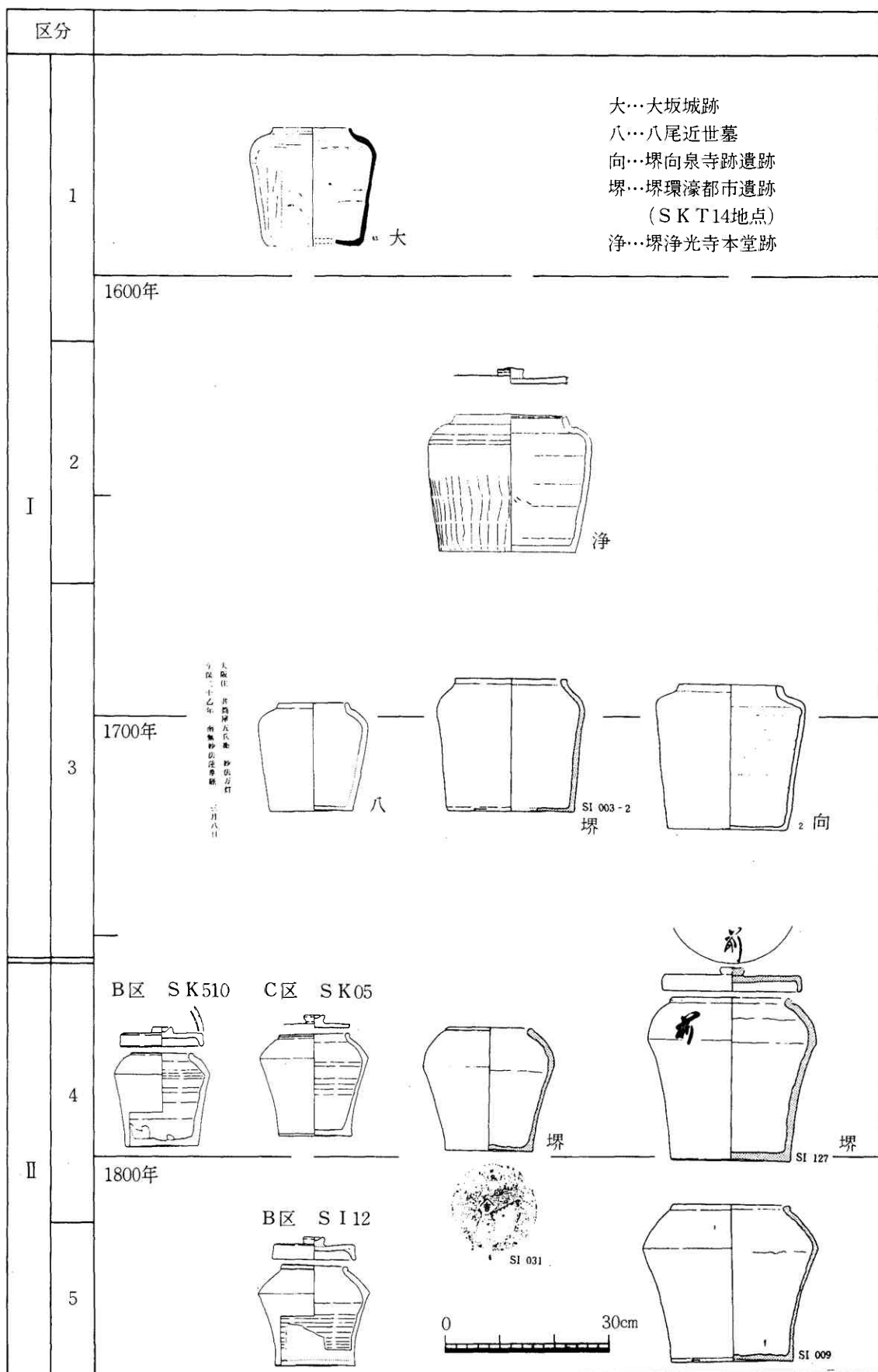


図10 土師質土器壺編年試案

## 胞衣壺考

## ①. 考古学における研究

考古学において胞衣を埋める風習が取り上げられたのは、縄文時代の住居跡内埋甕の性格をめぐる論議においてである。昭和42年桐原 健氏が小児棺と胎盤収納の可能性を指摘したのに<sup>22)</sup>始まり、幼児埋葬説をとる渡辺 誠氏<sup>23)</sup>や胎盤収納説の木下 忠氏<sup>24)</sup>らによって論議が繰り広げられた。

つぎに、昭和59年に水野正好氏は、平城京右京五条四坊三坪から出土した奈良時代中頃の胞衣壺の例を取り上げられ、その埋納方法や思想について明確に示された<sup>25)</sup>。

また、事例としては、縄文時代のものは多数報告されている。それ以外では、福岡県春日市辻田地区近世墓の例<sup>26)</sup>、兵庫県明石市明石城下町の例<sup>27)</sup>、東京都新宿区北山伏町遺跡の例<sup>28)</sup>、先頃報告された平城京左京五条五坊十坪から出土した奈良時代中頃～後半の例<sup>29)</sup>などが見られる。最後の例では、化学分析によって、胞衣壺であることを明らかにしている<sup>30)</sup>。

しかし、歴史時代における胞衣を埋める風習に対する考古学的関心は、水野論文以後ようやく見開かれた所であり、まだまだ低いと言わざるを得ない。

## ②. 民俗例に見る胞衣を埋める風習と伊丹郷町出土遺物

民俗学では、産育習俗の研究の中で、多くの研究者が各地の事例を紹介している。また、その意味するところについても、多くの論文が出されている。

各地の事例については、古くは恩賜財団母子愛育会編『日本産育習俗資料集成』（第一法規 1975年）に集成されており、最近では、文化庁『日本民俗地図』V（国土地理協会 1977年）や各都道府県が刊行している『民俗地図』に集成されている。

それをみると、この習俗は日本全国で第2次大戦後までなんらかのかたちで行われていた事がわかる。また、その事例も各地で異なっており、複雑な様相を呈していることがわかる。

兵庫県下の民俗例を『兵庫県民俗地図<sup>31)</sup>』でみると、

- a. 産室の床下 養父郡・加古郡・龍野市
- b. ニワの口 城崎郡・出石郡・朝来郡・養父郡・宍粟郡・神崎郡・赤穂郡
- c. 墓地 全域
- d. アトザンバ 城崎郡・養父郡・朝来郡・宍粟郡・作用郡・姫路市・龍野市・揖保郡・飾磨郡・氷上郡・多紀郡・明石市・加古川市・洲本市・三原郡
- e. 桑の木の下 城崎郡・美方郡・養父郡・宍粟郡

などとなっている。アトザンバとは、後産を埋めるための特定の場所を言い、山・河原・海岸などの例がある。このうち、最も多いのがcの墓地に埋める例であり、特に伊丹市周辺のような都市化の進んだ地域に顕著である。

この地図を作成した際（昭和56・57年調査）の伊丹市南野の例<sup>32)</sup>では、「壺に入れ、一

の辺の墓に埋めた。埋めたあと足でトントンと踏んだ。「埋めたあと最初に通った者がこわい。親でないといかん」と言った。」という。また、鴻池では<sup>33)</sup>、「お産用のふとんでくるんで父親が野墓にうめた」という。

筆者が伊丹市の旧郷町内で聞き取りした例でも墓地で処理したとのことである。

宝塚市上佐曽利の例では<sup>34)</sup>、明治30年（1897）ごろまでは、マヤ（馬屋）かナンド（産屋）の下に埋めていたが、ヨナバカができてそこに埋めるようにかわった、と言い、その際、ヨナタリがあるため、夫が夜に埋めに行ったそうである。

西宮市下大市では<sup>35)</sup>、伊丹市鴻池の例に似て、オサンプトンなどといっしょにカップで包み、日の当たらない所（納屋・便所の隅）においておき、翌日か翌々日の「お日さんがでていない時」といって朝早くか夕方に夫が墓へもって行って埋めた、という。

尼崎市中食満でも<sup>36)</sup>、父親が他人にみられないようにして朝日の出る前か夕方に墓地に埋めた。

川西市国崎では<sup>37)</sup>、明治10年（1877）生まれの人は、ウブヤの下に穴を掘って埋めたといい、明治30年（1897）生まれの人では、墓のアトザンイケに埋めたという。また、容器は、ヨナステ（ヨナツボ）であった。埋める際には、人の踏まない所に埋めた。

隣接する大阪府の例を『大阪府民俗地図<sup>38)</sup>』でみると、

- a. 墓地に埋める・捨てる
- b. 墓地の井戸に捨てる
- c. ヨナバカ・ヨナステバなどに捨てる
- d. ヨナトリ・エナ屋などがくる
- e. 産婆が始末する
- f. 役所がとりにくる
- g. 床下に埋める
- h. 玄関や門口に埋める
- i. 梅の木の下に埋める
- j. 四つ辻に埋める
- k. ウマヤの隅に埋める

などとなっている。

これらの事例の分布は、a、bなど墓地に埋納する例が大阪市を除く周辺地域全域に見られ、もっとも多い。また、c例も同じ範囲でみられる。これは兵庫県のアトザンバと同じ例で大阪府の場合、墓地に隣接することが多い。

d、e、fの例は、大阪市とそれに隣接する都市化が早くからすすんだ地域に見られる。

後述するように、古い例と考えられるg以下の例は周辺の古くからの習俗をよく残している地域に見られるが、数少ない。

胞衣産考

また、これにまつわる言い伝えでは、人がよく通るところに埋めると出世するとかはずかしがりやでなくなる、といった先の例とは逆の事を言ったり、埋める時に鍬で上を叩いてはいけない、埋めた上を最初に歩いたものを恐れる、最初踏んだ者をその子が一生こわがるといって主人が踏む、といった同じ言い伝えも見られる。

これらの例から、伊丹市周辺の民俗例では、

A. 明治の中頃までは産屋の下や馬屋の下に埋めていたが、のちに墓地に埋めるようになった。

B. もって行くのは父親で、日のあたらない時間にもって行く。

C. 埋める場所は人の踏まない所を選んだり（逆もある）、最初に父親が踏んだりする。といったことが読み取れる。このうち、Aは、のちに述べる通り明治の中頃に風習の変化があったことしめす重要な証言である。B・Cは、各地の例にもみられ、とくにCの最初に父親が踏むということでは、のちに文献史料で見えるように、新生児が最初に通ったものを怖がるためといい、父親の言うことをよく聞くようにという思いと他の虫や動物に汚されないようにという思いがあるようである。

考古学者の木下 忠氏は、『埋甕—古代の出産習俗』にこれを次のようにまとめられている<sup>39)</sup>。

- (1) 家の戸口に埋める、戸口の敷居の下に埋める。
- (2) 土間のすみ・台所に埋める。
- (3) 馬屋・牛の駄屋に埋める。
- (4) 産所の床下・縁のしたに埋める。
- (5) 便所の床下に埋める。
- (6) 便所の踏み石の下に埋める。
- (7) 軒下・雨だれ落ちに埋める。
- (8) 方位をみて屋敷の内に埋める。
- (9) 分れ道に埋める。
- (10) 海に沈める、浜の砂に埋める。
- (11) イナ墓・エナ埋め場に埋める。
- (12) 墓地に埋める。
- (13) エナ屋がとりにくる。

このうち、(11)以降は、明治の中頃から後半にかけてだされた『胞衣産穢物取締規則』によって生まれたものであることを指摘している<sup>40)</sup>。これは、

胞衣及出産ノ節汚穢物投棄禁止ノ件府告諭第二号

明治二十年三月（1887）

従来出産ノ節胞衣ヲ邸内或ハ床下ニ埋藏シ汚穢物ハ河溝或ハ山野ニ投棄スルノ習慣有之



衛生上極メテ有害ニ付自今其無害ノ地ヲ選定シ焼却若シクハ埋却候様致スヘシ  
 という京都府の布告<sup>41)</sup>に見えるように、当時の衛生観によって(1)～(10)の行為をやめさせるため、各都道府県から出されたものである。これによって、当時このような埋納が一般に行われていたことが知られる。これはまた、本論に重要な意味をもっている。即ち、伊丹郷町出土の胞衣壺と考えられる土師質土器壺が、幕末～明治の遺物を最後としていることと良く合致するのである。

先の民俗例でも、これは確認される。さらに、都市部では古い事例が伝わっておらず、周辺に残されていたことから、この取締規則は当時の都市部で早く浸透し、周辺ではやや遅れて受け入れられたことがわかる。伊丹市では、古い納め方が伝わっておらず、早くこれを受け入れた都市部に類することもわかるのである。

また、(1)・(2)・(4)の例は、伊丹郷町の土師質土器壺の出土場所と良く一致する。

このうちの、(8)については、易学の考え方によっており、同書でも引いておられるように、高島易断所本部編『神宮館家庭暦』には、胞衣を納めるにはその年の歳破、暗剣殺、五黄殺、本命殺を避け、生児の本命の相性の吉方、またはあきの方位に納めるのが良い、とされている。あきの方とは、その年々の吉方・恵方のことで、石上堅『日本民俗語大辞典<sup>42)</sup>』には、次のように説明されている。

「歳神が大陸からの暦法－陰陽五行の渡来によりきまる。その十干のうち、甲・乙・戊・庚・壬を、陽干、乙・丁・己・辛・癸を陰干とし、陽干の年はその五行のさす方位（甲の年ならば甲）、陰干の年には、その合干のさす方位（乙の年ならば庚）を歳徳神（歳神様）のいる方角とするので、これを日本でアキノカタとした。エホウとは、エトのエの方角という意で、漢字に吉方とあてた。恵方はつまり、歳の神の祝福にこられる方角である。たとえば、甲己の年ならば、甲の方の寅卯の間、すなわち東北東が恵方となる。」

伊丹郷町の埋納例で、庭に埋納されているものは、このような考え方にもとづくものと考えられ、(8)も該当しよう。このように、伊丹郷町の土師質土器壺の出土場所は、明治以前の胞衣の埋納場所と良く一致するのである。

ところで、伊丹郷町D－1地区の例で、紙にかかれた文句のうち「土生金 金生水」は陰陽道のうちの五行の相生の順序の一節である<sup>43)</sup>。その意味するところは、土は万物の芽生えを意味し、これは新生児に通ずる。金は財産につながり、新生児の将来の繁栄を祈念している。また、金から生ずる水は火を押さえ、火災などの起こらぬようにと言った願いが含まれている。このように、胞衣壺を納める場所や内容には、このような考え方が入っている。しかし、これがいつのころから言われているのかは、次の項で触れたい。

同書には、このほか胞衣壺として用いられる容器の地域差についても民俗例を集成されており、甕・壺・蛸壺・徳利・土瓶・炮烙・桶・ひしゃく・碗・さんだわら・こもやむしろ・馬のくつ・わらづと・あわび貝・芭蕉の葉・白紙・油紙・ぼろなど、実にさまざまな

## 胞衣壺考

ものが利用されたことを明らかにしている。したがって、必ずしも土師質土器壺とは限らないわけであるが、関東・近畿・中国・四国・九州などの地方では、壺を用いることが多い。先の民俗例でも、これは確認される。

### ③. 文献史料に見る胞衣を埋める風習と伊丹郷町出土遺物

それでは、なにによって伊丹郷町のものを胞衣壺と断定できるのか。それは、以下の文献史料によってである。胞衣を埋める風習については、『古事類苑』 禮式部六 誕生祝下（神宮司廳蔵版 吉川弘文館 1982年）に「蔵胞衣」として文献史料が集成されている。これをみると、胞衣については『日本書記』神代記にすでに「先以淡路洲為胞」として登場することがわかる<sup>41)</sup>。

また、胞衣を埋める風習については、平安時代後期の『長秋記』元永2年（1119）条<sup>42)</sup>をはじめとして江戸時代に至るまで公家・武家の間で行われていることがわかる。このほか、水野論文で指摘されているように、康和元年（1099）の『大記』『康和元年御産部類記』には、「被納胞衣、大納言并左小弁顯隆、奉仕其事、加入瓮中金銀犀角墨筆小刀歟」とあるのを<sup>43)</sup>初めとして、『玉藻』承元三年（1209）五月条に「次入錢五文於白瓷瓶子以文為上相塚  
五十九文外」次以胞衣入錢上、次新筆一管入胞衣上<sup>44)</sup>とあるなど、胞衣を錢五文・墨・筆などといっしょに壺に入れたことを示す史料がいくつかみられる。これによって、伊丹郷町出土のものも胞衣壺であることは、明白となった。従って、壺のなかにあった茶褐色の固形物は、胞衣そのものであると考えられる。

水野正好氏は、前掲論文において、筆・墨をいれることの意味を、次のように述べておられる。「筆・墨といった律令官人のシンボルが胞衣にそえられ、誕生した新生児の将来を描く文物としてあたえられている所に官人の夢が垣間見られるのである。こうした慣行の遡源が唐代官人制をめぐる産育に求められるであろうこともまた十分に考えられるところである。」と<sup>45)</sup>。

江戸時代の町屋跡から出土した胞衣壺の墨・筆の意味するところは、先の律令官人にかわって伊丹郷町の繁栄を支えた商人・職人たちの、生活上で必須な読み書きの上達を願ってのことに間違いなからう。

江戸時代の文献史料にも、胞衣を納めることについての記事が多く見られる。このうち宝暦13年（1763）～天明4年（1784）に綴られた『貞丈雑記』の祝儀の項<sup>46)</sup>には、「一、胞衣を納る時、今世男子は墨・筆を入れ納む、是今世のことにあらず、古よりの事なり。

（中略）女子の時、糸針等を入る事は、未古書に見當たらず、男子の時、墨筆を入るより起りし事なるべし」と書かれており、筆・墨を入れる例は、男子の場合であることがわかる。

また、『婦人養草<sup>50)</sup>』には、「都がたにては、地下人の子どもうまれて後、是を門の敷居

の下などにうづみ、方角をえらび納る事なるを、田舎にては、産家の板敷の下へうづみ、又かさねての産する時も同所に埋るなり、されば不浄の氣を求め、狐狸一切の妖獣怪鳥これをうかがひ、産の時障礙をなす」と述べており、同書が成立した貞享3年（1686）頃一般にもひろくおこなわれていたことや、都では門の敷居の下に、田舎では産室の下に埋めるなどという習慣の違い、同じ場所に埋めると弊害があると考えられていたことなどが読み取れる。

このほか、納め方についても、文献史料はおおくの事実を教えてくれる。今、この中でとくに伊丹郷町の資料を理解するために必要な記事をあげると、蓋を必要とすることについては、『伊勢家秘書誕生之記』<sup>51)</sup>には、「胞衣を納、石の蓋をしてかへるなり、虫などの不入様にするものなり、蟲入らば兒煩物也、うごかぬ様に有べし」とある。同じ言い伝えは、先にみた民俗例にも見られる。胞衣は新生児の分身であり、これが他の物に犯されることを嫌ったことから生まれた思想であろう。

また、易学などの影響は、先の『玉蘂』承元三年五月条にすでに「御湯間汲吉方水、御湯之間洗胞衣、吉時昇居槽於便宣所」とある。このころは陰陽道が隆盛であり、出産に際してはかならず陰陽師が随伴している。おそらく、彼ら陰陽師たちによって考え出されたのであらうと考えられる。

## 6. おわりに

以上、この風習について先学の業績によりつつ、述べてみた。

このように伊丹郷町出土の土師質土器壺は、胞衣壺として埋納されたものであることがわかる。

伊丹郷町では、先に見たように、土師質土器壺を用いる埋納例は、現在のところ18世紀中頃～後半の例を最古としている。それ以前について明らかでない点は、今後の課題である。それ以後の例は、郷町内の各所で出土しており、盛んに行なわれたことを我々に示してくれる。しかし、明治に入ると検出例はなくなる。これは、「取締規則」によって風習が変化したためと考えられるのである。

このような風習のもつ意味については、民俗学の研究では感染呪術の問題として<sup>52)</sup>、あるいは、産育習俗のなかの産穢の問題として<sup>53)</sup>論じられている。しかし、これに伴う言い伝えや儀礼の意味も含めて、この風習を説き明かすには至っていない。

現在、近世の胞衣壺に関する考古資料は伊丹だけでなく、全国で相次いで出土している。さきにみたように、この民俗例は全国でみられ、類例はさらに増えるであらう。また、文献史料・考古資料から、奈良時代からは確実に行われており（縄文時代から行われている可能性を否定するものではない）、中世の遺跡からも出土する確立は非常に高いと言える。今後これらの点にも、注意を払って行く必要があらう。また、その意味についても、今後

## 胞衣壺考

考古学の立場から発言していけることと考える。

最後に本文をなすにあたって、御助力、ご指導戴いた方のお名前を記し、御礼を申し上げます。兵庫県教育委員会 岡崎正雄氏、長谷川真氏、伊丹市博物館 和島恭仁雄氏、伊丹市教育委員会 小長谷正治氏、八尾市教育委員会 米田敏幸氏、大阪市教育委員会 鈴木秀典氏、堺市教育委員会 土山健史氏・嶋谷和彦氏、八王子市教育委員会。

追記 本稿を脱稿後、八王子市における胞衣埋納の考古資料を手にすることができた。この地方では、近代以降の例として「寿」の字を刻印した「カワラケ」を合わせ口にしている例が一般的であることが知られる<sup>54)</sup>。

## 〔註〕

- 1) 『伊丹市史』第2巻 伊丹市役所 1968年
- 2) 八木哲治編『伊丹資料叢書6 伊丹古絵図集成』伊丹市役所 1982年
- 3) 『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年
- 4) 佐藤 驍「胎盤」『世界大百科事典 14』平凡社 1966年
- 5) 木下 忠『埋甕—古代の出産習俗』雄山閣 1982年の8頁。
- 6) 前掲注2)
- 7) 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として—」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1984年
- 8) 兵庫県教育委員会 長谷川真氏の御好意により、実見し御教示を受けた。
- 9) 伊丹市教育委員会 小長谷正治氏の御好意により、実見し御教示を受けた。
- 10) 朽木史郎他『特別史跡姫路城跡』兵庫県立歴史博物館 1985年
- 11) 嶋谷和彦他「堺環濠都市遺跡発掘調査—宿院町東4丁 SKT14地点・調御寺跡—」『堺市文化財調査報告第二十集』堺市教育委員会 1984年
- 12) 森村健一「堺・浄光寺本堂跡と湊焼・甕について」『摂河泉文化資料』第19・20号 摂河泉文庫 1980年。土山健史氏・嶋谷和彦氏の御好意により、実見し御教示を受けた。
- 13) 堺市教育委員会 1985年調査
- 14) 土山健史「向泉寺跡遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告第十二集』堺市教育委員会 1983年。土山健史氏の御好意により、実見し御教示を受けた。
- 15) 中尾芳治他『大坂城跡Ⅲ』財団法人大阪市文化財協会 1988年の73頁。鈴木秀典氏の御好意により、実見し御教示を受けた。
- 16) 米田敏幸『八尾近世墓』八尾市教育委員会 1987年の図版四。米田敏幸氏の御好意により、実見し御教示を受けた。
- 17) —1. 前掲注14) の36頁。  
—2. 北野俊明・野田芳正「堺環濠都市遺跡発掘調査報告—市之町西3丁 SKT20地点—」『堺市文化財調査報告第二十集』堺市教育委員会 1984年の399頁。
- 18) 坪之内徹也『高島城址発掘調査概要・Ⅵ』大阪府教育委員会 1980年の56頁。
- 19) 辻村泰圓他『日本仏教民俗基礎資料集成』第一巻 中央公論美術出版 1976年
- 20) 北野俊明・野田芳正「堺環濠都市遺跡発掘調査報告—市之町東4丁 SKT19地点—」『堺市文化財調査報告第二十集』堺市教育委員会 1984年の295頁。
- 21) 横井 清「的と胞衣—日本中世文化史への二つの視点」『社会史研究』3 日本エディータ

## 大手前女子学園（大手前女短大研集）「研究集録」第9号（1989年）

スクール出版部 1983年

- 22) 桐原 健「縄文中期に見られる埋甕の性格について」古代文化18巻3号 1967年
- 23) 渡辺 誠「縄文時代における埋甕風習」月刊考古学ジャーナル40 1970年
- 24) 前掲注5)。  
同書は、縄文時代の住居跡内の埋甕について、これが胞衣壺であることを立証することを目的としたものであるが、その際、日本全国のみならず世界中の民俗事例を丹念に取り上げている。また文献史料も多く紹介され、現在のところ胞衣壺に関して最もまとまった研究書である。本論もこれに導かれる所が大きかった。
- 25) 水野正好「相蒼籬記 壹叢」『奈良大学紀要 第13号』奈良大学 1984年
- 26) 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第9集』福岡県教育委員会 1978年
- 27) 兵庫県教育委員会 長谷川真氏の御教示を得た。
- 28) 東京大学遺跡調査室 鈴木裕子氏・渡辺ますみ氏の御教示を得た。
- 29) 鐘方正樹他「平城京左京五条五坊十坪の調査 第148次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』奈良市教育委員会 1989年
- 30) 帯広畜産大学 中野益男・中岡利泰、北海道測量図工社総合化学研究所 福島道博・中野寛子・長田正宏「付論 平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺の残存脂質について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』奈良市教育委員会 1989年
- 31) 『兵庫県民俗地図』兵庫県教育委員会 1985年
- 32) 伊丹市博物館 和島恭仁雄氏の御好意により、カードを見せて戴き、御教示を得た。
- 33) 前掲注32) に同じ。
- 34) 和田邦平「民俗編」『宝塚市史』第7巻 宝塚市役所 1980年
- 35) 『下大市の民俗』西宮市教育委員会 1982年
- 36) 山下幸子「第4章 尼崎の民俗」『尼崎市史』第10巻 尼崎市役所 1974年
- 37) 地主 喬「川西の民俗」『かわにし 川西市史』第7巻 川西市役所 1977年
- 38) 『大阪府民俗地図』大阪府教育委員会 1983年
- 39) 前掲注5) の7頁。
- 40) 前掲注5) の118～119頁。
- 41) 平尾幾太郎編『京都府衛生法規全』 1907年
- 42) 石上 堅『日本民俗語大辞典』桜楓社 1983年
- 43) 吉野裕子『陰陽五行と童子祭祀』人文書院 1986年の25頁。
- 44) 『古事類苑』禮式部六・誕生祝下（神宮司廳蔵版）吉川弘文館 1982年の394頁。
- 45) 同上。
- 46) 塙 保己一編『続群書類従』第三十三輯・雑部・巻第九百九十八 続群書類従完成会 1970年
- 47) 前掲注44) の398頁。
- 48) 前掲注25) の44頁。
- 49) 伊勢貞丈・島田勇雄校注『貞丈雑記』1 平凡社東洋文庫 1985年
- 50) 前掲注44) の394頁。
- 51) 前掲注44) の393～394頁。
- 52) フレーザー著 永橋卓介訳『金枝篇1』岩波文庫 1969年
- 53) 近藤直也『祓の構造』創元社 1982年の第1章 産着以前、他多数。
- 54) 土井義夫・戸井晴夫『八王子城跡』東京造形大学構内地区遺跡調査会 1986年  
梶原 勝他『宇津木台遺跡群Ⅹ』八王子市宇津木台地区遺跡調査会 1987年  
『八王子市埋蔵文化財年報』昭和62年度 八王子市教育委員会 1988年  
『八王子市埋蔵文化財年報』昭和63年度 八王子市教育委員会 1989年

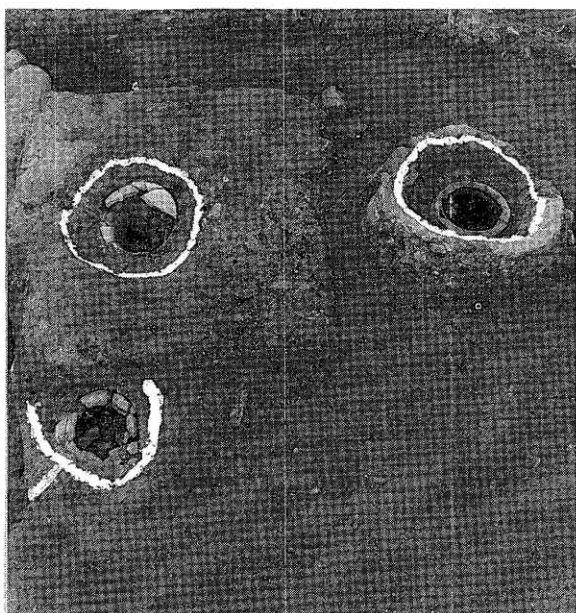
## 胞衣壺考

同書の「南八王子地区遺跡No.12遺跡出土のエナ処理カワラケについて」は、これらの資料をまとめたものであり、注目される。末筆ながら、八王子市教育委員会の方々に御礼申し上げます。

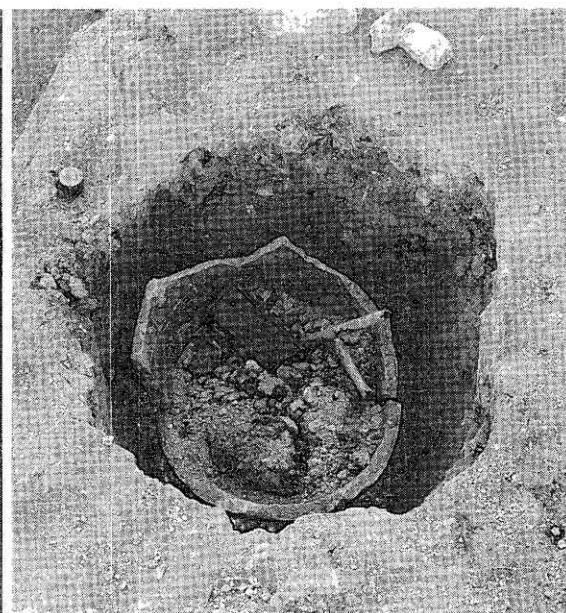
大手前女子学園（大手前女短大研集）「研究集録」第9号（1989年）



B-1-1地区 第1次全景（西より）



B-1-1地区 S I 02・03・11

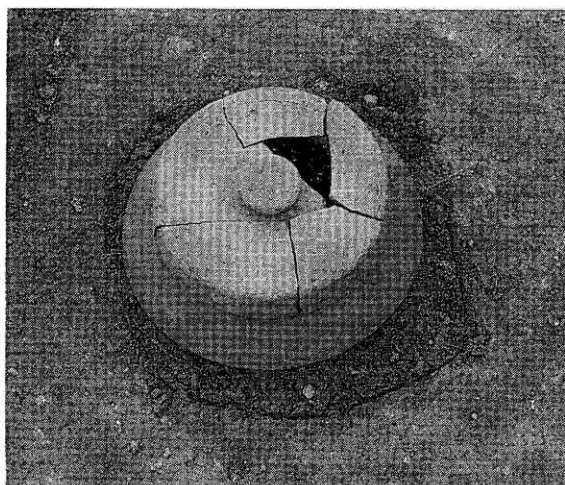


B-1-1地区 S I 11

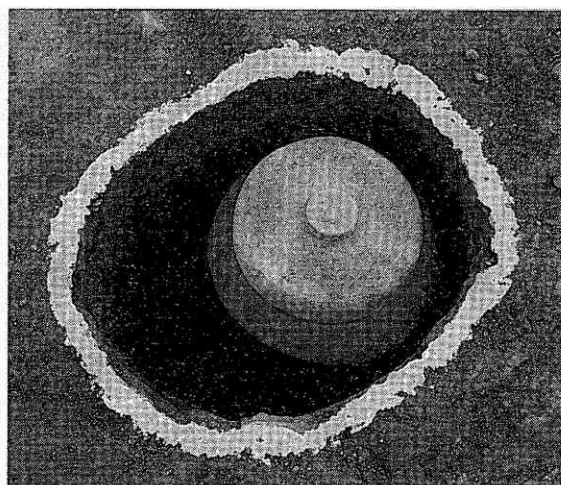
図版1



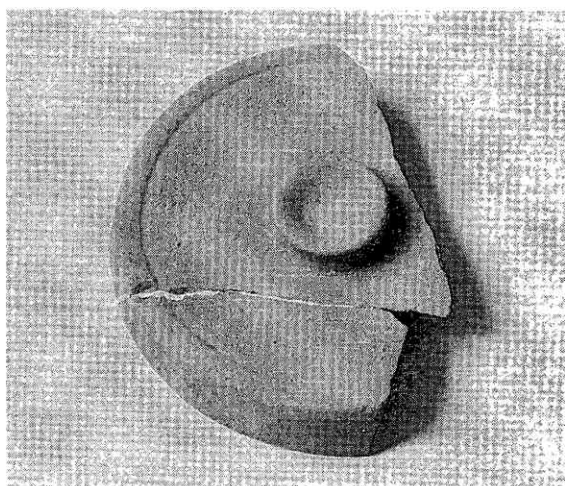
胞衣壺考



B-1-1地区 S I12



B-2-1地区 S I06



八尾近世墓出土遺物



八尾近世出土遺物

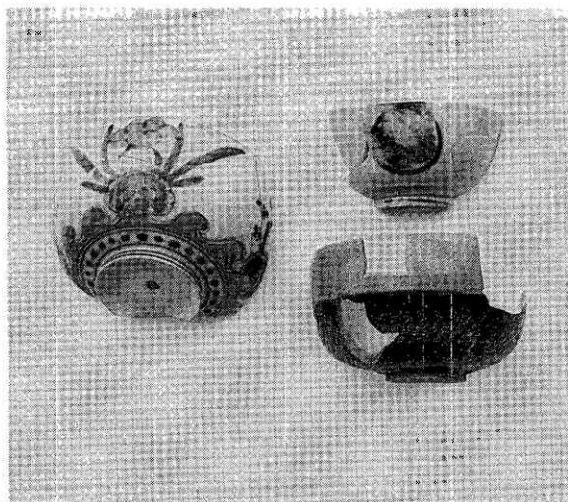


B-2-2地区 SK510

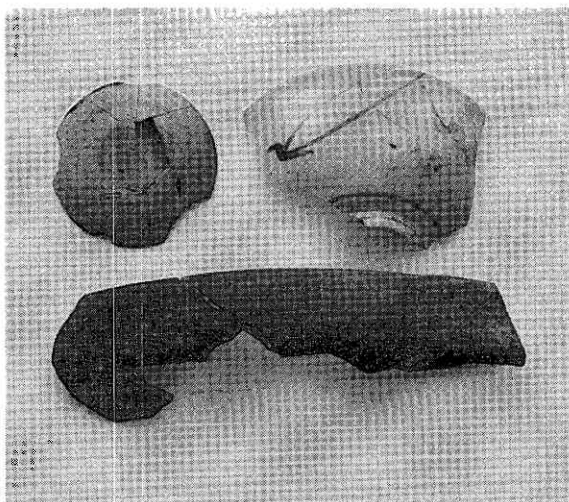
図版2



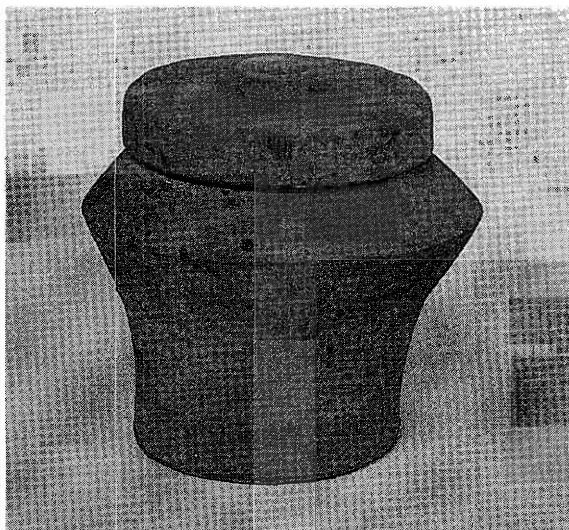
大手前女子学園（大手前女短大研集）「研究集録」第9号（1989年）



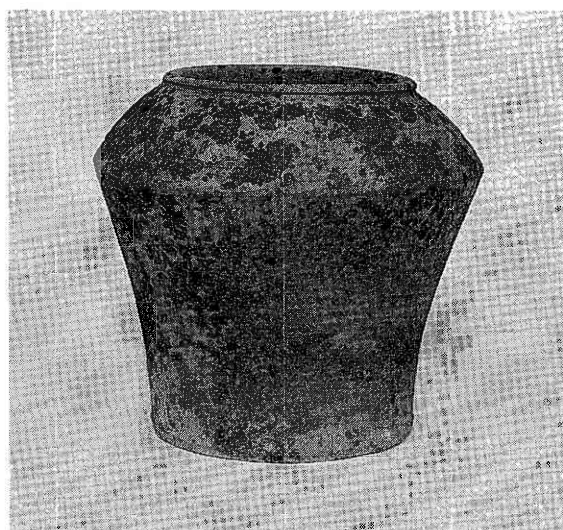
B-2-2地区 SK510



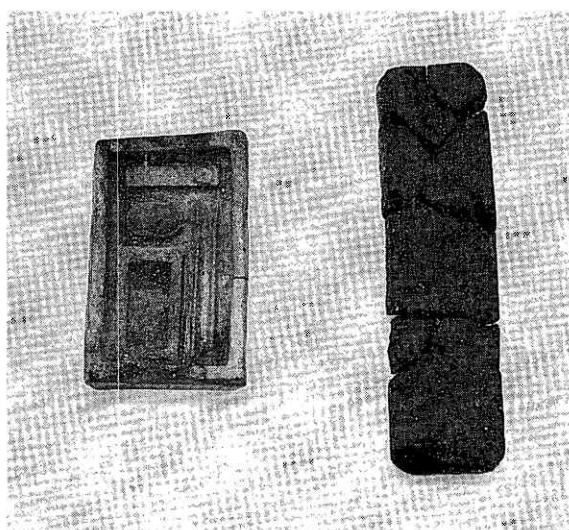
B-1-1地区 SI12



B-2-1地区 SI06



C地区 SK05



同左

図版 3